

氏名・(本籍地)	新藤 篤史(東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	甲第120号
学位授与の日付	平成31年3月15日
学位論文題目	清朝前期統治政策の研究
論文審査委員	主査 宮 寄 洋 一 副査 小 林 伸 二 副査 窪 田 新 一 副査 二 木 博 史

新藤 篤史氏 学位請求論文審査報告書

## 「清朝前期統治政策の研究」

### 論文の内容の要旨(1200字以上)

本論文は、清朝の前期における藩部に対する統治体制、特にモンゴルに対する統治がどのように行われたのかを検討したものである。分析の中心となるのは、統治を行う清朝皇帝の権威がどのように変容したのかを、チベット仏教との関係から読み解いていくことである。

第1章では、清朝の前身であるマンジュ国に導入されたチベット仏教が、どのような系譜を持つのかを検討している。まず、マンジュ国創建間もない頃に遼陽に招聘されたダルハン・ナンソが、ホルチン・モンゴルのハタン＝バートルの集団から来たことを示し、やがて清朝皇帝と姻戚関係を築いていくモンゴル名家との関係構築の契機を明らかにしている。次いで、明との対立の中での「ラマ」の役割が検討される。明朝はヌルハチの興起に当たってモンゴルに対してラマを派遣し、内情を窺わせたりモンゴルの意識を反ヌルハチに向かわせたりしていた。そうした中で、マンジュ側には明との対立の間にラマという存在を間に立てることが対立関係の打開策になり、更にはモンゴル諸部との関係にも有用だとの考えが出現するとする。そして、マンジュ側は招聘間もなく死去したダルハン・ナンソに続いてバ・ラマを招き、引き続きチベット仏教の導入を進めていったことが明らかにされていく。

第2章では、清朝皇帝がモンゴル諸部を統治するための権威の由来がどこにあるのかが検討される。筆者はそれを1586年にアバタイがダライラマ3世から授けられたハーン号にあるとする。ハルハ・モンゴルの支配者の一人であったアバタイのもとに来訪した商人の中にゲルグ派僧がおり、彼は次第にチベット仏教に傾倒し、やがてエルデニ・ジョーを建立してダライラマ3世を招いて帰依した。これにより13世紀のモンゴル族とサキヤ派との関係が、ハルハ・モンゴルと新興のゲルグ派との接合によって再構築されたことが明らかにされるのである。この関係は17世紀においてハルハのトシェート・ハーン家から出たジェプツンダンパを介して清朝に受け継がれ、康熙帝がチベット側やモンゴル側から「マンジュシュリー・ハン(文殊皇帝)」と称されるようになり、モンゴルを統治する権威となったと述べている。

第3章では、清朝の、統治における権威がどのように変容したか、ハルハを含めたモンゴル支配がどのような形で行われたかが検討される。ハルハでは、ダライラマ5世との関係をめぐり、トシェート・ハーンとガルダンの対立が生まれており、ジェプツンダンパはその後ろ盾を清朝に求めた。この争いの中、アラシャン・ホシュートのバートル・ジノンを通して、清朝はハルハに続いてモンゴル西部に支配領域を確立していくと述べられている。また、1680年代頃から山西省の五台山での寺院建立や改修などを通してチベット仏教の拠点を形成し、特に新たに建立された台麓寺を対モンゴル政策の出先機関としていたことが明らかにされた。更には、ダライラマ5世から具足戒を受けたチャンキヤ2世は18世紀初頭に康熙帝から「国師」の称号を授けられるが、彙宗寺を中心にマンジュ人、漢人、モンゴル人に対する教化を推進した。彼の活動の背景には、チベットのダライラマ政権に対する圧力があり、そこにチベット政府に優越する清朝皇帝の権威が確立されていくとまとめられている。

### 審査結果の要旨(1200字以上)

新藤氏の提出論文は、以下の点において高く評価できる。

第一に、清朝がモンゴル及びチベットを支配しうる権威の所在について、その起源、マンジュへの移転及び定着、そして変容と、約200年にわたって論理的に説明している点が挙げられる。かつてはモンゴルの支配下のユーラシア大陸東端に生まれた新興の清朝(マンジュ国)が、草原地帯に広がるモンゴルを支配しえた根拠が、様々な史料の分析を通して明確に示されている。藩部領域についての史料は漢語・満州語・チベット語・モンゴル語のものが存在するが、新藤氏はそれらすべての原典史料にあたっているため、多角的な視点から論を組み立てており、非常にオリジナリティのある論文となっている。

第二に、ハルハにおける仏教興隆の問題を、清朝皇帝の権威確立につなげたことである。清朝が中華世界と遊牧世界を統合して18世紀にはそれまでになかった広大な領土を獲得することとなるが、その最終局面とみなされるジューンガル遠征の端緒となったのがこの問題である。その契機となるのはトシュート・ハーン家のジェプツンダンパ、ジューンガルのガルダン、ダライラマ5世の関係悪化によるとされている。これまでの研究の多くがジェプツンダンパの「転生」自体に焦点を当てていたものを、転生の原則を丹念に追うことにより、ターラナータの転生者であるためにダライラマ5世と対立した、というこれまでの定説以上の問題がある可能性を指摘する。即ち「転生」は後世の誤解或いは付託であり、ジェプツンダンパ等の清朝への亡命により、康熙帝との補完関係が造成され、それによって康熙帝の「マンジュシュリー・ハン(文殊皇帝)」という権威が誕生する、という考察は説得力を持つ。

第三に、五台山におけるチベット仏教信仰とモンゴル支配を接合している点である。清朝とチベット仏教の関係を語る上では、熱河離宮(承德避暑山荘)周辺の外八廟や北京内城の達頼廟などが取り上げられるであろう。五台山でもチベット仏教寺院が多数存在することは知られており、清朝皇帝の信仰の厚さの象徴とみなされている。しかし新藤氏は、新たな観点を提示する。即ち、康熙帝によって国師と称せられたチャンキャ2世は、その意を汲んで五台山・彙宗寺を通して清朝皇帝の権威をモンゴルに対して体現したというものである。

本論文に対して幾つかの疑問点も指摘された。特に、第1章第1節冒頭に示された満・漢・蒙語による碑文史料の掲載意図がきちんと説明されていないこと、論文中の各所に多用されているモンゴルの「部」という用語について、当時の実情と整合しない使用のしかたをした部分があること、などである。しかし、先行研究をきちんと消化してその空白部分を埋め、多岐にわたる史料を駆使して論理正しく論述する姿勢は、幾つかの欠点を補って余るものだと言える。清朝の統治は上記の如くマンジュの本拠地、中華世界、モンゴルからチベットにかけての遊牧世界など広い領域におよび、その中核たる皇帝が如何なる権威を帯びて支配したかという問題について、儒教皇帝、遊牧民のハーンなど幾つかの論拠が提示されてきた。新藤氏の論文は、モンゴルの支配者の権威とチベット仏教の権威が如何にして結びつき、清朝の遊牧民支配に影響を及ぼしたのかということを、論理的に実証し、清朝統治についての新しい視点を提起した論文であるといえる。

以上の観点により、論文審査及び口頭試問を経て、審査員一同は新藤篤史氏の提出した論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものだと結論に達した。

#### 公表予定

日程	平成 年 月 日
公表形態	①掲載誌名：【                      】【                      】号・巻 【                      】頁 【全文・要約】
	②単著(発行者)
題目	<※タイトルを変更した場合>